帝京短期大学 紀要 No. 22：43－54，2021

コロナ禍における保育者養成課程の現状と課題
――教員の語りから考える――

白取　真実・林　恵・溝口　綾子・五十嵐　元子・三島　秀晃
若原　真由子・髙橋　裕勝・小野　浩孝・近藤　万里子
小林　賢司・髙橋　かほる・天野　泉・永井　理恵子
帝京短期大学　こども教育学科

【抄録】

【問題・目的】2020 年の新型コロナウイルス感染症による教育機関での休講措置は，大学にも大きな影響を及ぼした。本学においても約 2 ヶ月にわたり面接授業が中止され，その間遠隔授業が実施された。本学科では，教授内容や課題などの紙媒体教材を郵送する方法と ICT（office365）を併用した授業が行われた。その現状と課題を，こども教育学科の教員の座談会を通して，明らかにするものである。

【方法】座談会での逐語録を基に，カテゴリー化を行い，それぞれの概要をまとめた。それぞれのカテゴリーからカテゴリーの中核となる意見を抽出し，検討を行った。

【結果】①紙媒体教材を使用した遠隔授業について，② ICT（office365）の利用について，③遠隔授業時における教員の思い，④学科の運営方法について，⑤学生の様子，⑥在宅勤務の状況についてなどのカテゴリーに分類された。

【考察】このコロナ禍における遠隔授業の取り組み全体については，教員が感じた学生の取り組みの様子から，一定の効果があったと考えられる。本学科においては，紙媒体教材が遠隔授業の中心ではあったが，ICT（office365）を併用し，チャットや teams 機能を使用しながら学生へのサポートを行った。複数のツールを使用したことにより，教員と学生，学生同士が交流する機会に繋がり，このことが学生の意欲を保つ上で有効であったと考える。遠隔授業の課題には，学生のモチベーションをいかに保つかという点がある。紙媒体教材では，フィードバックに時間がかかり，授業回数を重ねるごとに学習意欲が低くなっている学生の姿が見受けられた。一方で，ICT（office365）を利用したオンライン授業では，学生とのやり取りがしやすいというメリットがあるものの，自宅に PC がない学生も多く，学生の ICT 環境の補償を考える必要がある。また，座談会のメンバー構成によっても語られる内容が異なり，教員のキャリアともかかわっていることが示唆された。

緊急事態による遠隔授業は代替措置的なものではあるが，コロナ禍の保育者養成課程での取り組みの一例として，今後の基礎的な資料としたい。

【キーワード】コロナ禍，保育者養成課程，遠隔授業，キャリア形成

Ⅰ．はじめに

帝京短期大学こども教育学科は，2005 年に生活科の保育士コースとして新設，2007 年にこども教育学科として開設され，2020 年度で 13 年目を迎える。こども教育学科こども教育専攻こども教育コースは 2 年制で，幼稚園教諭二種免許状を取得することができる。さらに，1 年制の専攻科に進学することにより保育士の資格取得が可能である。2020 年度 3 月卒業生の約 9 割が，幼稚園教諭・保育士・支援員等の幼稚園教員免許・保育士の資格を生かし就職しており，開設以来多くの保育者を輩出している短期大学である。

2020 年 4 月，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行拡大（以下この状況をコロナ禍と呼ぶ）により，我が国においては緊急事

態宣言が発令され，全国各地の学校は約2ヶ月にわたって休校となった。帝京短期大学こども教育学科においても，4月から始まる授業と，今年度実施予定の実習について，これまでと異なる状況下に置かれ，早急な検討と対応が求められた。その結果，本学科単独の授業については，紙媒体教材による教授内容の説明の郵送，課題の返送等，郵便によるやり取りを中心に授業を進めることとなった。また，他学科との合同の科目については主にICT（office365）[注1]を利用した授業が行われた。

2020年10月の執筆時点では，対面での面接授業が行われ落ち着きを取り戻しつつあるものの，コロナ禍の社会的混乱は未だ終息が見えず，今後第二波の到来も危惧されている。

帝京短期大学こども教育学科では，2020年度前期の取り組みを終えた段階で，教員同士の意見交換，および振り返りを目的とした座談会を実施した。本稿では，座談会での教員の語りを元に，本学こども教育学科のコロナ禍における保育者養成課程の現状と課題を報告する。

Ⅱ．方法

1．調査対象者

調査対象者は，帝京短期大学こども教育学科の専任教員13名である。職位と保育者養成校教員としての経験年数は，Table 1に示した通りである。

Table 1．保育者養成校教員としての経験年数

グループ	職位	保育者養成校教員としての経験年数
1	教授	30
	教授	19
	教授	9
	教授	35
	講師	16
2	教授	23
	准教授	6
	准教授	7
	講師	18
3	講師	5
	講師	5
	助教	1
	助教	2

2．調査時期

教員による座談会は，前期の授業終了後の2020年7月に行われた。役職や経験年数等を考慮して，3グループに分かれて実施された。

3．調査内容

座談会のテーマは，“コロナ禍における取り組みを振り返る”とした。あえて司会進行担当者は立てずに，自由に意見交換をすることを共通認識のもと行われた。

4．分析方法

座談会の内容を，内容を以下のような手続きを取りながら分析を行った。

(1) IC レコーダーに録音した内容をすべて起こし，逐語録を作成した。

(2) 逐語録を読み込み，座談会の内容の中で，コロナ禍の遠隔授業の取り組みにおいて重要な1次カテゴリーに該当する箇所を抽出した。

(3)（2）で抽出した1次カテゴリーに，内容を踏まえて，2次カテゴリーを付け，一つの2次カテゴリーに対して，一つずつの概要を記した。

(4) 研究会を開き，カテゴリー化した内容について意見交換を繰り返し，カテゴリー内容の検証を行った。

以上の方法を用いて，コロナ禍における，遠隔授業という未知の取り組みを，教員がどのようにとらえていたのか，それぞれのグループにおいて特徴的な部分を中心とし総合的に考察していく。

5．倫理的配慮

こども教育学科教員同士が共同研究者となり，研究の趣旨については，共通認識のもとに行った。調査開始前にワーク会議等で協議を重ね，全員の了承を得た。5名からなる研究会を立ち上げ，データの取り扱いについてはこのグループ内で共有した。

Ⅲ．結果と考察

1．グループ1

(1) カテゴリーの分類と内容

抽出された1次カテゴリーは「Ⅰ．紙媒体教材について」，「Ⅱ．ICT（office365）」，「Ⅲ．教員の思い」の三つであった。2次カテゴリー

としては，紙媒体教材についてが四つ，ICT（office365）が三つ，教員の思いが三つの計10個であった（Table 3）。以下グループ1の特徴的なところを，教員の語りを交えて考察する。

(2) 教員が捉える学生の姿と教員の思い

グループ1では，現代の学生の姿を捉えた上で，教育観や保育観が述べられている点が特徴的である。

教員の語り①からは，教員が捉えた現代の学生の特徴が伺える。スマートフォンを利用することで，会えなくとも容易につながることができ，またチャットというオンラインを使用した会話が学生にとって利用しやすいという姿をとらえている。加えて，教員の語り②からは，表現関係の授業やメール等，自分で表現することが求められる場面での学生の能力が低下していることを捉えている。

このような学生の姿に対して，「Ⅲ．教員の思い」の概要をまとめると，「同僚を思いやる社会性や，子どもの行動から意図を読み取る力を身に付けてほしい」「子どもとの直接の関わりを通して子どもを理解してほしい」という，子どもの理解や，保育者としての在り方を身に付けてほしいという期待が込められているということがわかる。

グループ1の教員は，豊かな教職経験を持ち合わせた教員の集団である。現代の学生の様子を，自身の経験から捉えるだけでなく，時代の背景から客観的に捉えていることがわかる。また，コロナ禍という特殊な状況下から得た経験に対しても，「新たな学び方を経験したことによって，そこから得る学びを深めてほしい」「人間の表現力を土台にすればそんなことも乗り越えることができる」といった，コロナ禍の経験を生かすという前向きな姿勢が読み取れる。

教員の語り①

入学式はしてないけどみんなで連絡取り合ってパーッとやっていますというような大学もかなりあるし，対面の時にはあんまり親しいんで驚いたというのもよく聞くんですね。お互いに情報も知っている，そんなに孤独ではない。だから，そういう時代なんじゃないかなと思います。 そういうことを活かせば，活かし方ってあるのかもしれないという思いが半分くらいあります。 面白いなっていう思いですね。

教員の語り②

今の若者は子どももそうかもしれないけど，口に出すよりチャットする方ができる子が多いと思います。ほかの方法による表現力，つまりものを書く，身体を動かす，何かを作るとか，媒介物を通して表現をしていくという能力が著しく低いところにあるんじゃないかと感じたんです。ただ喋り続けるんじゃなくて，紙，ネットであれ何かを書く，文章として思いを綴る。あるいは何かを作って想像していくということの多様な表現の力が相対的に難しいんではないかと思ったんですね。

(3) 遠隔授業の限界

教員の語り③からは，遠隔授業の限界が語られている。本学科においては，表現系の科目を中心に6月後半から，対面での授業を開始している。教員の語り③からは，自宅にピアノがない学生もおり，改めて対面での授業の重要性が述べられている。前期授業の後半で対面での授業が開始されたことにより，紙媒体教材の内容についてのフィードバックを対面で行うことができた。このことが，前期授業15回を終えるにあたっては，非常に重要な役割を果たしていたことが予想される。

また，教員の語り④からは，遠隔授業の課題として，子どもとの直接的な関わりの中での学びの不足を読み取ることができる。遠隔授業下における紙媒体教材での取り組みについては，「学習時間も含めて学生が一生懸命取組んでいた」と評価した上で，学生は教科書の内容から子どもの姿を想像して取り組むことで精一杯だったとしている。

コロナ禍における遠隔授業は，まさに想定外の出来事であり，教員も学生も試行錯誤の上で乗り越えたまさに緊急事態であった。本学科が取り組んだ，紙媒体教材についてはある一定の効果があったと言えるが，面接授業に代わるものではないということは言うまでもない。学生が個人で取り組んだ紙媒体教材の内容を，実習や今後の指導に生かすことが，今後の課題である。

教員の語り③
　ピアノ実技の事なんですけど，集中でやりますよと言われて，2コマ続きで大変は大変なんですけど。ほかの科目はピアノの曲に難易度を付けて二つくらい課題を出したんですけど，結局半分くらいの学生は鍵盤楽器がないんですよ。 やはり対面の授業って大事だなと改めて思います。

教員の語り④
　学生が自分で想像した中で（子どもの姿を捉えるのが），精一杯だったと思うんですね。教科書の文言からなんとなく（子どもの）姿を想像しながら書いてきた。 そういうことに関しては，ものすごく学生たちは戸惑いと難しさとあったと思うんですね。

Table 2. グループ 1（(　) 内数字は同意見の数）

1次カテゴリー	2次カテゴリー	概要
Ⅰ．紙媒体教材について	作成方法	身近にある素材を題材として選んだ（3）
		ピアノが自宅にない子のために紙鍵盤を作成した
		手書きで課題を作成した
	内容	課題は教科書を見て解ける内容にした（2）
		教員も自己紹介を書いた上で、学生に自己紹介文を書いてもらった。
		難易度別の課題を出した
	良かったところ	書くことで自分を見つめなおすことにつながっている様子が見られた（2）
		学習時間も含めて学生が一生懸命取り組んでいた。（2）
		短期間で学生を理解するのに役立った
		教科書の内容から子どもの姿を想像して取り組んでいた
		紙課題を通して学生とのつながりを感じることができた
		紙課題の方がよく書いている子もいた
		学生自らが素材を選ぶことができた
		遠隔授業で力を発揮する学生がいた
	問題点（課題）	ピアノが自宅にないのに課題を出さなければならない（2）
		教科書を使っての自習では理解できない学生がいた（2）
		取り組み量に個人差があった
		自己中心的な文章しか書けない学生がいた
		学生からの評価がわからない
Ⅱ．ICT（オフィス365）	教員の思い	なるべく早くレスポンスをするように気をつけた
		ICTを使いこなすのにも表現力が必要となると思った
		ICTも上手く取り入れることが大切
	良かったところ	オンデマンドの形態は、表現活動をする上では役に立つ
		携帯は機能を有効に使うことができている。
	問題点（課題）	やってみたが教員自身が利用の限界を感じた
		アイパッドを使用しての遠隔授業は難しかった
		学生によって取り組みの量が異なっていた
Ⅲ．教員の思い	学生の様子	チャットは学生にとって利用しやすいのではないかと感じた
		全体的に表現力が低下している（文章を書く、体を使って表現するなど）
		スマフォを利用してすぐにつながることのできる世代だと思う
	授業について	保育観を伝えたい（2）
		対面授業のありがたみを感じた
		このような状況だから課題を出したら出席にしたい
	教育保育観	保育観を伝えたい（2）
		子どもとの直接の関わりを通して子どもを理解してほしい
		学生の「気持ち」を大切にしたい
		新たな学び方を経験したことによって、そこから得る学びを深めてほしい
		同僚を思いやる社会性や、子どもの行動から意図を読み取る力を身に付けてほしい
		子どもは遊びの中で経験したことによって学ぶ。最初からやり方を教えるのは良くない
		人間の表現力を土台にすればそんなことも乗り越えることができる

2. グループ2

(1) カテゴリーの分類と内容

抽出された1次カテゴリーは「Ⅰ．紙媒体教材について」,「Ⅱ．ICT（office365)」,「Ⅲ．学科運営」,「Ⅳ．在宅勤務」の四つであった。2次カテゴリーとしては，紙媒体教材についてが4つ，ICT（office365）が五つ，学科運営が二つ，在宅勤務が二つの計13個であった（Table 4)。以下グループ2の特徴的なところを，教員の語りを交えて考察する。

(2) 紙媒体教材を取り入れた経緯

グループ2では，主となる遠隔授業の方法を，office365を使用するのではなく，紙媒体教材を選択した経緯について語られていることが特徴的である。

教員の語り⑤～⑦からは，本学科が紙媒体教材を取り入れた理由が述べられている。その理由としては，本学科では通信教育課程が設置されているためそのノウハウを生かすことが可能であること，学生の保有するICTの環境がわからないこと，実習に向けて「書く」という力を身に付けてほしいということなどがあげられている。

この話題があげられている背景には，グループ2の教員が，本学科において主に実働的な役割を担っている教員の集まりであることが考えられる。グループ2の教員のうち，2名が各学年の主任的な役割を担っており，学生への連絡調整等を取りまとめ行っている。また，教育実習，保育実習，施設実習の授業主担当がそろっている。尾関・山田・末本・青野（2010）によると，大学教員は組織で勤労する職業であり，大学教員の経験が10年以上あることで，委員会や評議員等の教職以外の業務や役割が増えていくとしている[1)]。学校全体としての取り組みが決まったoffice365の使用と，本学科独自で進めることとなった紙媒体教材の使用について，本学科の学生の姿に合わせた課題として，迷いはありながらも導入を進めていった経緯と教育的配慮をつかむことができる。

教員の語り⑤

多分オンラインを導入するときに，こども教育学科は通信教育のノウハウを持っているからそれも生かしてっていうようなことを学長がおっしゃってましたよね。 オンラインだと学生のWi-Fiの状況がよくわからないし，繋げられなかったら学習できないから。それじゃあまり意味ないよねって言って，紙媒体教材にしようって。

教員の語り⑥

確か，授業の開始を，連休後に遅らせるふうにしてしまうと，こども教育学科の場合はその後スクーリングに入っていくから，夏休みに授業が開始されてしまうと，教員が動けないっていうことになって。夏までには学科の授業が終わっていないと大変だと思って。だから，通信でやろうという学科長の話を振り返り，先見の明というかしっかりされてるなと。

教員の語り⑦

日誌を書くとか考えたら，やっぱり書く作業ってこの先，要するに授業とか実習とかで求められること多いから，やっぱり慣れとこうっていうのはあったと思う。 やっぱパソコンで打つものと書くものとでは思考の仕方が違うと思う。 無意識にうちの学校の学生の学力，書く準備しなきゃ実習に行かせられないというのが当然ありましたよね。

(3) ICT（office365）の利用について

本学においては，全学科を対象として，office365の導入が進められた。グループ2では，このoffice365を使用することに対して教員の思いや，具体的な使用例，良かったところ，問題点（大変さ)，学生の様子などが多く語られていた。

office365の使用について，他学科ではあるが，グループ2の教員のうち2人が授業で使用した経験がある。また，専攻演習の授業の中で，office365機能であるTeamsやFormsを活用した例が多く語られている。

このような取り組みを通して，教員の語り⑧では，次回遠隔授業になった際にはoffice365を使用したい，または科目単位での選択を可能とする案が話されている。この話題の背景には，教員が予想していた以上に学生がICT(office365)を使いこなしていたことが影響していると考える。Teamsでは，学生が分からないところを質

Table 3. グループ 2（(　) 内数字は同意見の数）

1次カテゴリー	2次カテゴリー	概要
Ⅰ．紙媒体教材について	作成方法	学生に教科書が届いていない事態があり、資料も付けて課題を作成した
	内容	文科省、厚生労働省の設定している内容は網羅できるようにした
		アマビエを描く課題をだした
	良かったところ	通信教育のノウハウが生きた
		手書きをすることにより日誌を書く力につながった
		小規模な学科だからできた
		学生と教員との信頼関係が役になった（専攻科）
		教員自身が office365 に慣れていないことから紙課題の方が安心だった
		印刷・発送作業が他の教員の課題の量と雰囲気を知ることにつながった
		学生の反応を見て、課題の内容を少しずつ変えた
		他の教員にアドバイスを受けることができた
	問題点（大変さ）	対面授業で教える内容を網羅できなかった（2）
		教員によって考えが異なるので、課題の出し方が異なる
		印刷発送が大変だった
		フィードバックが遅い
		文字以外の情報量が少ない
		回数を重ねるごとに学生が飽きてきた
		学生と話し合って決める時間もなく紙課題となった
		他学科とは異なる遠隔授業のスタイルをとった
		学生からの評価がわからない
		新任で学生との関係が全くない中で課題を作成した
		課題の内容や量について不安があった
		課題が大変という声が多かった
Ⅱ．ICT（オフィス365）	教員の思い	office365 の導入が急だった
		次回以降は科目単位で決めることがよい
		学習保障の必要性がある
		後期に遠隔授業になった場合はハイブリットにしたい
	使用例	Fomsを利用して、園児に向けた動画を作成する課題を出した。
		Fomsを使用して学生面談をした
		Teamsを使用して、チャットを利用して話し合う場を作った。
		七夕飾りをTeamsにアップして、共有した感想をレポートさせたができていた
		Teamsを使用して、資料の共有ができる
	良かったところ	紙課題と両立できたのがよかった
		チャット機能は既読がわかる
	問題点（大変さ）	ネット、プリントアウトの環境がない学生への保障が必要である（4）
		導入には教員間での意識の差がある（2）
		学生のPC、ネット環境を把握できなかった
		履修カルテのオンライン化が求められる
		科目数が多いと学生への負担が大きい
		90分間の授業をスマホだけで参加するのは難しい
	学生の様子	学生が予想以上にできた（4）
		チャットで繋がりを持てたことで、対面した時の学生の反応が良かった
		wordを利用することは難しいかもしれないが、動画を作るのは得意。
		PC環境を整えた学生が多かった
Ⅲ．学科運営	学生への対応方法	情報により混乱しないように気を付けた
		学生と連絡を取り合える状況を確保した（1年生）
		個別対応が必要な学生に対してだけ電話で連絡をした
		こまめな連絡、いつも以上に密なやり取りをした
	連絡調整	非常勤の先生との連絡調整について（2）
		夏のスクーリングにより授業日程の変更が難しかった
Ⅳ．在宅勤務	通信環境	在宅の環境が整っていない
	問題点（大変さ）	環境は自分で整えるというのは課題である

問すると教員側もすぐに返答できるなど，フィードバックがしやすいことにより，モチベーションを保ちやすいというメリットがある。しかし，スマートフォンの小さい画面を利用して授業に参加している学生も多く，長時間の視聴は難しい。ICT（office365）の導入には，学生の PC や WI-FI を含めた ICT の環境をどのように保障するかということが課題である。

教員の語り⑧

私は途中で紙が嫌になっちゃって，フィードバックできなかったんで，結局。まあやれるけど，フィードバックがすごく遅くなるし，学生の理解度がこの時点でどれくらいかっていうのが，全く分からないまま進めなきゃいけなくて，もうそれが苦痛になってきたかな，自分の中で。紙の束を見るとうんざりするみたいなのが，自分のほうにも，多分学生はもっとだと思うけど。 自分のほうにも出てきちゃって。なんかこう，即座にレスポンス，まあそれは私たちも，学生の顔が見えないから，分かってるのか分かってないのかっていうところが読めない。普段の授業だと顔見ながらやってるから，そういった面で紙でのやり取りっていうのは，すごく，文字以外の情報量の少なさがやっぱり厳しかったなあっていうのが，すごくあるかな。

3. グループ 3

(1) カテゴリーの分類と内容

抽出された 1 次カテゴリーは「Ⅰ．紙媒体教材について」，「Ⅱ．ICT（office365）」，「Ⅲ．在宅勤務」，「Ⅳ．学生の様子」の四つであった。2 次カテゴリーとしては，紙媒体教材についてが四つ，ICT（office365）が四つ，在宅勤務が二つ，学生の様子が二つの計 12 個であった（Table 5）。以下グループ 3 の特徴的なところを，教員の語りを交えて考察する。

(2) 紙媒体教材について

グループ 3 では紙媒体教材の作成方法，内容，実施した結果について多く話されていたのが特徴的である。紙媒体教材の内容としては，主に「教科書を見て解ける内容にした」こと，設問形式や，イラストや写真を多く取り入れるなど，視覚的にもわかりやすい内容にしたことがあげられている（Table 5）。

紙媒体教材の良かったところとしては，考えを書かせることにより，学生の内面理解につながった，学生の学力がわかったなど，学生理解につながった点があげられている。

教員個人の課題としては，「学生のレベルにあった課題をつくることができなかった」「面接授業で教える内容を網羅できなかった」などがあげられている。

グループ 3 の教員は，全体の教職経験も平均 3 年と浅く，4 名中 3 名が新任者である。2020 年 4 月，国の緊急事態宣言が発令され，大学の仕組みや，学生の様子がわからないまま，一度も面接授業をすることなく，遠隔授業に突入することとなった。そのため，紙媒体教材の作成に多くの時間がかかったこと，また内容についても試行錯誤していた様子が伺える。中村・神藤・田口・西森・中原（2007）によると，大学教員初任者の教育に関する不安の構造としては，「教育方法に関する不安」「学生に関する不安」「教育システムに関する不安」の 3 因子が報告されており [2]，本研究においてもこの 3 因子に相当する内容が多いことがわかる。

(3) 在宅勤務

「緊急事態宣言」を受けて外出自粛要請が強化され，本学においても在宅勤務が推奨された。グループ 3 では，在宅勤務に関する話題が多く取り上げられていた。

教員の語り⑨からは，在宅勤務の課題として，「わからないことを確認するのに時間を要する」ことがあげられている。この点については，教員の語り⑩において，わからないことはその都度他教員に確認をすることで，不安が解決できたという例も報告されている。中村他（2007）は，大学新任教員の教育不安と職場におけるサポート，および職務内容満足度との関係と検討した結果として，先輩教員のサポートが満足度を上げる要因となることを明らかにしている [3]。これらのことから，在宅勤務という孤立した状況下においては，わからないことをすぐに確認できる方法の確立や，細やかな連携が重要な役割を果たしていたと考える。

教員の語り⑨

私の場合ですと今年からこの養成校につき

Table 4. グループ 3（(　) 内数字は同意見の数）

1次カテゴリー	2次カテゴリー	概要
Ⅰ．紙媒体教材について	作成方法	ZOOMを使用して、教員同士で課題の打ち合わせを行った
		1回分の課題を両面で紙1枚に収めて管理できるようにした
		1回目以降、学生が取り組んだ課題を見て、内容を変えた
		授業の課題の作成を任せてもらった
	内容	課題は教科書を見て解ける内容にした（３）
		設問形式だとよくできていた
		イラストと写真を多く取り入れた
		ピアノが自宅にない学生のために紙鍵盤を作成した
	良かったところ	学生の学力がわかった
		回数を重ねるうちにだんだんと書けるようになった学生がいた
		個別の課題ということで、普段の授業よりも頑張っている学生がいた
		考えを書かせることによって、学生の内面理解につながった
	問題点（大変さ）	学生のレベルにあった課題をつくれなかった（４）
		回数を重ねるうちに手を抜く学生がいた（２）
		対面授業で教える内容を網羅できなかった（２）
		実技的な内容が欠けてしまった（２）
		科目によって同じような内容の課題があった（２）
		時間のゆとりがない中、課題の内容については早急な対応が求められた（２）
		全くついていけていない学生がいた
		体験を通して学ぶことができなかった
		1時間分の授業課題を作成するのに半日かかった
		フィードバックのタイミングが遅かった
		郵便トラブルで時間を取られた
		紙鍵盤は役に立たなかった
Ⅱ．ICT（オフィス365）	教員の思い	自身がoffice365の使用に苦戦した、研修が必要（３）
		学生に使い続けてもらいたい（３）
		教員側もoffice365のスキルがついた（２）
		ハイブリッドの割合を増やしてもよかった
		入学後に講習するなどの方法がよいと思う
	良かったところ	提出・返却が容易
		学習意欲が保たれる
	問題点（大変さ）	学生の画面と教員の画面が違うため、質問があっても答えられなかった（３）
		スマフォを利用している学生は資料が見づらい
	学生の様子	office365の使用の仕方がわからず、個別の対応が必要な学生がいた（３）
		学生が予想以上にできた（２）
		２年、専攻科は、office365使用した授業がほとんどなかった
		ネット環境を整えた学生が多かった
		誰に質問していいのかがわからないという不安が聞かれた
Ⅲ．在宅勤務	良かったところ	通勤時間がない分仕事に集中できた
	問題点（大変さ）	わからないことがあってもすぐに確認することができない（２）
		通信料が高くなった（２）
		通信環境を新たに整えた
		学生対応をしていてもタイムラグが生じる
		子どもがいて仕事にならない
Ⅳ．学生の様子	学習以外の様子	就職、実習、将来についての不安を抱えている（３）
		夜にメールする学生が多い（３）
		メールでのやり取りが難しい（２）
		電話をかけたときに質問してくる学生が多かった
		課題に対する質問はあまりない
		退学を希望する学生が少なかった
	教員の対応方法	時間を決めて対応した（２）
		学生サポートデスクへ質問するように促したら、解決できる問題が多かった
		アイパッドのアプリを使用して指導した

始めたっていうのもあるし，後は実習とかその辺がまだ詳しくない部分があったので学校の仕組み自体がまだ理解できていないままというのがあります。まずそこでついていこうとするのに自宅にいる時間が長かったので，なかなかその都度確認をするというのが，難しかったです。

教員の語り⑩
学生から聞かれても答えられないときが最初はあったので，そこが一番大変でした。私の場合は他の先生方と連絡先を交換させていただいたので，そこで確認させていただきながら進めることができたのでよかったです。

Ⅳ．おわりに

本研究では，2020 年度前期のコロナ期を教員自身が振り返り，コロナ禍における保育者養成課程の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

本学科では，遠隔授業のベースを紙媒体教材として，前期授業を進めてきた。2020 年 7 月に朝日新聞と河合塾が 768 の大学に行った調査によると，全授業または一部をオンラインで実施していると回答した大学は 94％にものぼる [4)]。本学科においても，授業こそ一部ではあったが，紙媒体教材だけでなく，ICT（office365）を使用した取り組みの中で，チャット機能や Teams を使用して課題を共有する試みなど，教員と学生，または学生同士が交流することができたことは，学生の意欲を保つ上で有効であったと考える。また，コロナ対策をした上で，6 月下旬の早い段階から面接授業を開始したことにより，紙媒体教材のフィードバックを面接授業で行うことができたことが，教育効果を向上させたのではないかと推測する。

しかし，遠隔授業は決して面接授業に代わるものではない。感染症拡大防止の観点から臨時対応的に遠隔授業を行うことを強いられたが，グループ 1 の話題でも出てきたように，教科書の中から子どもの姿を想像することで精一杯で終わったという学生の姿からは，知り得た知識を深めるという点に欠けていたことは言うまでもない。授業という営みの中で，教員対学生，学生同士，または実習を通した子どもとの直接的な関わりから得ることの重要性を，改めて実感する機会となったのではないだろうか。

また，本研究ではこども学科の教員を，大まかに経験年数で 3 グループ分け座談会を実施した点が特徴的であった。当初，教員同士の話しやすさを考慮してグループ分けを行ったが，結果としては非常に興味深いデータとなった。グループ 1 のベテラン層では，教育観や保育観などの教員の思いが熱く語られていたのに対して，中堅層では学科運営や学生指導の観点から，若手教員は紙媒体教材の作成や自身への指導助言を必要とする内容などが話題としてあげられていた。立石・丸山・猪股（2013）は，教員経験によって蓄積されていく日々の経験こそが，教員能力の形成にとって重要なポイントであるとしており [5)]，ベテラン層の教員グループの談話の中には，教員としてのあるべき姿や，時代背景から学生を捉える視点など多くを学ぶことができる。しかし，大学教員のキャリアと能力形成の課題を明らかにした石井（2010）は，経験年数による FD ニーズの異差を明らかにしており，経験を経ても教員としての課題がなくなるわけではないとしている [6)]。本研究においても，経験年数による差が明確に示されたことから，今後職層による研修の充実や，教員間の交流を視野に入れた研究の充実が求められる。

最後に，保育施設においては今もなお，危険ととなり合わせの中，コロナ対策と子どもへの保育の充実を求められて奮闘を続けている。緊急事態宣言下においても，家庭と子どもたちを支え続けた保育者の姿に，保育施設の重要性を再認識した人は少なくないだろう。大学は今，With コロナ /After コロナという時代に向け，新しい生活様式と文化を生み出すべき重要な時期を迎えている。本学科においては，コロナに負けない保育者の養成が果たすべき社会的責務である。

【注 1】

注 1）ICT とは，information and communication technology ＝情報通信技術の略である。情報通信技術とは，コンピュータとネットワーク（通信経路・ケーブルでコンピュータ同士を接続して相互通信すること）に関するすべての技術・設備・サービスな

どのことを指す。本学では，2020 年 4 月中旬より，Microsoft 社の office365 システムを使用して遠隔授業支援基盤システム（帝短 365）の使用を開始した。コロナ禍における休講時には，この帝短 365 に加え，WEB ポータルサイト，メールなど複数のネットワークを使用して，遠隔授業と学生へのサポートを行った。このことから，本論では技術・設備・サービスのことなどを総称して ICT（office 365）を明記した。

【文献】

1） 尾関美喜・山田政寛・末本哲雄・青野透（2010）大学教員を対象とした授業改善の現状に関するケーススタディ ― メディア教育研究，6（2），014-020

2） 中村晃・神藤貴昭・田口真奈・西森年寿・中原淳（2007）大学教員初任者の不安の構造とその不安が職務満足感に与える影響　教育心理学研究，55，491-500

3） 前掲 2）

4） 朝日新聞（2020）受験生の減少，退学・休学の増加 … コロナ禍，大学を直撃　毎日新聞デジタル　7 月 29 日

5） 立石慎治・丸山和昭・猪股齢之（2013）大学教員のキャリアと能力形成の課題 ― 総合的能力の獲得に及ぼす個別能力・経験・雇用形態の影響に着目して－　高等教育研究，16，263-282

6） 石井美和（2010）大学教員のキャリア・ステージと能力開発の課題：広島大学教員調査と東北大学教員調査から　東北大学高等教育開発推進センター紀要，5，29-42

Current Status and Problems of ECEC Teacher Training Course in Corona Disaster

——Consider from a teacher's round-table discussion——

Mami SHIRATORI・Megumi HAYASHI・Ayako MIZOGUCHI

Motoko IGARASHI・Hideaki MISHIMA・Mayuko WAKAHARA

Hirokatsu TAKAHASHI・Hirotaka ONO・Mariko KONDO

Kenji KOBAYASHI・Kahoru TAKAHASHI・Izumi AMANO・Rieko NAGAI

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】The lecture cancellation measure in all the Japanese educational institutions by new-model coronavirus infectious disease in 2020 affected the university greatly. Our junior college also suspended classes for about two months, and the distance learning was carried out. In this department, we carried out the class by using methods of correspondence education and ICT(office365) .The purpose of this study presented those educational effect and problems which we had by analyzing the round-table of the discussion of the teacher of Department of Child Education.

【Methods】On the basis of the verbatim record in the round-table discussion, the categorization was carried out, and each outline was arranged. The opinion which became a core of the category from each category was extracted, and it was examined.

【Results】They were classified into the following categories. (1) Distance learning using paper teaching materials (2) Use of ICT (office 365) (3) Teacher's feelings during distance learning, (4) Department management, (5) Student status, and (6) Telecommuting

【Discussion/Conclusion】For the whole challenge of the distance learning in this corona disaster, it seems to have some effect from the aspect of the challenge of the student whom the teacher sensed. In this department, though the paper medium teaching material was a center of the distance learning, the support to the student was carried out using ICT (office 365) jointly. By using multiple tools, it was connected with the opportunity in which teacher and student, student fellow communicate, and it is considered that this was effective, when the student kept having will to study.

As a problem of the distance learning, it is how to keep the motivation of the student. In the paper medium teaching material, the feedback took time. As the number of classes increased, students' motivation to learn decreased. On the other hand, in the on-line class using ICT (office 365), there is a merit of easy communication with the student, but there are many students without PC in their homes, and it is necessary to consider the compensation of the hardware side. In addition, the content of the discussion varied according to the composition of the members, suggesting that it was also related to the career of teachers. Though the remote lesson by the emergency is an alternative measure, As an example of the challenge in the ECEC teacher training course of the Corona disaster, it would like to make it to be future basic material.

【Key words】COVID-19 infection, ECEC teacher training course, distance learning, Career development of teachers